

備陽史探訪

第76号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

戦国大名の台所

― 覇者毛利元就の苦悩 ―

山口 義之

戦国たけなわの弘治三年（一五五七）、安芸の毛利元就は深刻な事態に直面していた。吉田郡山城三千貫の小身代から身を起し、厳島で陶晴賢を破り、大内氏を倒し、安芸・備後・周防・長門四方面の大名の座を確保した元就は、この年第一線からの引退を決意したのだが、その「隠居分」をめぐる嫡子の隆元が異議を唱えたのである。

元就は安芸武田氏の旧城佐東銀山城を隠居城とし、それまでの所領、多治比三百貫・中村百貫などに加え、武田氏旧領佐東四千貫の内の半分、二千貫を隠居分として要求した。しかし、隆元はそれが多すぎるというのである。四方面の太守という栄光の座に着きながら、これはいったいどうしたことか……。

実は、戦国大名といっても、その

「台所」はお寒い限りだったのである。小説などで読む戦国の武將は、強く逞しく豪奢なものだが、内実はそんなものではない。例えば毛利氏である。元就は四方面を領したといっても、その「隠居分」直轄領は二千五百貫（年貢が約二千五百石取れる土地）に過ぎなかった。彼の場合それでも多すぎるといわれた。

これは、当時の戦国大名の性格による。戦国大名は、後の江戸時代の大名のように、領国を一律に支配していたわけではない。彼らは、戦国を生き抜くためには、ライバル【国人】を蹴落とすだけではなく、取り込むことが必要であった。また、家臣達もそれぞれの領地に帰れば、一個の独立した領主であった。国人といい、家臣といい、彼らの領内には毛利氏の支配は及ばない。それにも増して国人・家臣を毛利氏の合戦に駆り立てるには「恩賞」という餌が必要であった【実は、初めに述べた隆元の「元就隠居分削減要求」はこれらの国人・家臣の突き上

げによるものだった】。

つまり、戦国大名の領国といっても、かつての同盟者【国人】や家臣の領地の集合体に過ぎず、元就のように自分の直轄領は僅かにしか過ぎない、という事態が生まれてくるのである。そのため彼らは手っ取り早い現金収入の道として、鉱山の開発や「市・港湾」の支配に躍りになった。鉱山はそのものズバリ「現金」が大名の懐に入るし、「市・港湾」からは流通の発達によって莫大な税収が得られた。

甲斐の武田信玄はたぐさんの金山を開発したといわれ、毛利氏も瀬戸内海沿岸への進出を熱望し【そこには内海交易や大陸との交易で栄えた港町があった】、石見銀山の領有をめぐる尼子氏と熾烈な争いを繰り返したが、言い換えれば、彼らにとって戦国を勝ち抜くための「軍資金」は、そうした方法でしか確保できなかったのである。

これを別の方法で得ようとすればどうなるか。年貢を増やせば農民の反抗を受けるであろうし、恩賞をケチれば国人や家臣は思うように戦ってくれない。戦国大名はその華やかな外面と比べて、その懐は実に苦しいものだったのである。

この点、織田信長は違っていた。

敵対者は容赦なく攻め滅ぼし、家臣たちも甘やかさなかった。そして、その家臣たちも毛利と違って土と離れた專業武士であった。その給与は直轄領の収入から充てられ【特に足軽などの下級家臣は】、毛利のように恩賞を与えなければ働かない、といった地侍ではない。



石見銀山争奪の攻防戦が繰り広げられた山吹城

この後この両者は「天下」を賭けて争うが、毛利が押され、結局信長のやり方を継承した豊臣秀吉の前に屈することになるのは、当然といえば当然なのである。

誰も読むな！奈良古墳旅行記

山口 哲晶

連日の仕事の疲れをおして奈良行きを決めたのは昨年の師走頃だったろうか。その頃、久しぶりに畿内の古墳を見たという思いに駆られていたのは確かだった。幾多の新発見も報じられていたし、あの土地に抱かれたいという心情も確かにあったのである。

当日は午前二時出発という強行スケジュールだったが、陽の明るいうちに数多くの古墳をみたいと思っていたのでこの計画はまんざらでもなかった。女房に見送られて平田氏の車に乗り込んだときは未だ半分頭が寝ている状態だった。山陽自動車道に入った頃にはようやく目覚め始めていたと思うが確かではない。

ところが、完全に目覚めなくてはならないときが来た。というより、目覚めさせられたというべきなのだろうが、彼の車に密かに積んであった、パチンコでせしめたという「CDラジカセ」が、突然という言葉そのものの轟音で鳴り始めた。まさに、脳みそ全体が鞭打たれる思いであった。クラシック音楽をこよなく愛する私にとっては拷問以外の何物でも

なかった。何せパチンコ屋に五分ほど居ただけで吐き気をもよおす私なのである。しかしまあ、運転している平田氏のご機嫌を損ねてはならないのだ。我慢するしかない。夜中どこをどう走っているのかは全くわからなかったが、一応は東に向かっているとは何となく感じていた。阪神高速を通り抜け、藤井寺市土師の里にある道明寺天満宮に着いたのは夜明け前だった。仮眠をとるまでもなく、境内に展示してある「修羅」の複製を探し、今回の旅の初めとした。

その後、市野山古墳（伝允恭陵）や菅田御廟山古墳（伝応神陵）を訪れ、濠に水をたたえた姿にしばし見とれる時間を重ねていった。陵墓にはもちろん入ることは許されていないが、周囲を歩いたり、木々の隙間から見える墳丘に目を凝らしたり飽きることはなかった。もちろん墳丘の上に立ったり、墳丘の上を歩けばそれに越したことはないのではあるが、こればかりは仕方がない。河南町の「近つ飛鳥博物館」に入るまでに葉室古墳群や一須賀古墳群を歩き、かなりの古墳を見た。博物館の中では埴輪のタガや黒斑、スカシを食い入るように眺め、「○○古墳出土」を見てはパネルと見比べて

歩いた。おそらく「あのオジンは何をしとんやろ」と思われたに違いない。ここで目を引いたのは大山古墳（伝仁徳陵）の模型で、数ミリ程度の人間までもが生き生きとして、作業する人々の小屋までが細かく作られ、まるで高く空から造営の一瞬を見ていた気がした。古墳の復元模型は数多く見たことはあるが、この風景には何とも言葉が出なかった。ただ子供のように額をくつつけてしばし眺めていた。

一日目は他にも、上城古墳（伝聖徳太子陵）、伝小野妹子墓（科長神社）、山田高塚古墳（伝推古陵）、二子塚古墳、高井田横穴墓群、松岳山古墳、牧野古墳、ナガレ山古墳、乙女山古墳、巢山古墳、河合大塚山古墳、島の山古墳、新山古墳、築山古墳（伝武烈陵）などゲップが出るほどたくさん古墳を見た。国宝の家屋文鏡を出した佐味田塚古墳は一時間以上かけて探し回ったが、馬見丘陵の原生林に阻まれ、ついに空振りになった。

泊まりは「橿原市サイクリングターミナル」。素泊まりならば二千元二食込みでも五千円弱という公営の宿であるが、設備は良い。ただし、ふとんの上げ下げなどはセルフサービスである。泊まっている人はごく

わずかで、かなりの穴場とみた。何より古墳群のまったただ中にあるのが最高である。

次の日は薄明るくなったら、宿の裏手にある「新沢千塚古墳群」に散歩としゃれ込む予定である。早く寝ようと思う間もなく横になつたらもう何も覚えていない。

翌朝は雨。それでも朝食前に傘を差して散歩に出かける。丘陵には隙間もないくらいに古墳が並んでいる。それらの間を縫うようにして遊歩道が続いている。傘に雨音が響く以外は静まり返っている。立ち止まっては古墳を眺め、そして、またゆっくり歩く。空は相変わらず低く重かった。田口会長が昼寝をしたというのはどこだろう。遠くに畝傍山が霞んでいる。

朝食後、外を見ると雨が止んでいた。今日はいよいよ飛鳥に入る。

まず、鳥谷ミサンサイ古墳（伝宣化陵）、榊山古墳（伝倭彦命墓）、益田の岩船、沼山古墳を見学。その後、岩屋山古墳の石室の見事さに感動し、牽牛子塚古墳に見入り、真弓鐘子塚古墳の石室の奇妙さに驚く。

そしてあの丸山古墳へ。広大な前方部へ登る。墳丘はきれいに整備されている。いずれこも陵墓参考地に指定されるだろう。そうなら



これが丸山古墳。前方面から後円部を望む。その大きさにはただ圧倒される。

もう入れない。今だけと思いつつ注意深く足下を見ながら土器を探し、造り出し部周辺で破片を採取した。

現在は、丸山古墳ではなく、平田梅山古墳の方が欽明陵に治定されている。こちらも周濠のある立派な前方後円墳である。隣接して謎の石像物として有名な猿石を持つ吉備姫墓がある。近辺には鬼の俎と雪隠（横口式石槨が分解したもの）、亀石など同じく珍石がある。

菖蒲池古墳を経て石舞台古墳へ。さらに、酒船石と隣接する最近発見された謎の石組遺跡、文殊院西・東古墳、艸墓古墳、秋殿南古墳、舞谷二号古墳などを訪れる。舞谷二号古墳は第二の空振りかと思ったが、なんとか発見できた。朝鮮半島の墓制を思わせる磚槨式の横穴式石室を持つ。それほど大規模なものではないが、内部は完全なドーム状である。

最後に三輪山の山麓に向かう。今回是非とも見たかったのは箸墓と纏向石塚であった。どうしても箸墓と石塚には会いたかった。冬だから箸墓の池には水が少ないはずだ、と勝手に思ったりもしていた。

箸墓の周りを歩きながら「やっと会えました。あなたはここに眠る前はという名前でしたか、これを作るとき葺き石を手伝いで運

んだのは本当ですか、この辺りの風景はずいぶんかわりましたか。」

多くの思いを心の中でつぶやきながら冷たい風の吹く中を時折立ち止まっては木々の隙間から見える墳丘を眺めては歩いた。纏向石塚は「何も残っていないんだから。墳丘なんてほとんどフライパンですから。いいんですか。本当にいいですね」の平田氏の言葉に耳をかざさず会いに行った。

箸墓と同じく特別の思いのあるこの石塚の上を私は歩いた。もう少いで陽が落ちてくる。

残念ながら二上山に沈む夕陽は見えなかったが、平田氏が教えてくれた「ここからの景色が一番いいんですよ」という、檜原神社から少し下った丘陵からの眺めは確かに心にしみた。大和三山に囲まれた盆地が霞の中に沈んでいて、イヤミのない風景が広がっていた。「山辺の道」も心に残った。この旅行を計画した平田氏にただただ感謝である。

ある作家は奈良の魅力を「未完成の美」と表現した。そうかもしれない。完成された京都の美しさに比べると、なんと奈良は私達の心を素直に受け入れてくれることか。今回の旅行でしみじみとそんなことを考えた。

吉備豪族の反乱 絶世の美女・稚媛

柿本 光明

古代吉備の豪族上道臣田狭の妻稚媛はどれほどの美人だったのだろうか。「天下の麗人でも、我が妻におよばない」と田狭がほめちぎったと『日本書紀』は伝えている。

宮廷に仕えていた田狭の自慢話は続く。

「美しくしなやかで、あらゆる美点が備わっている。華やかで潤いがあり、表情が豊かである。白粉や髪油も必要としない。広い世にも類を見ない。昨今ではひとり際立った美人である」

美人の条件は、際立つ上品さと明朗な性格、そして何よりも素顔の美しさということだろうか。しかし、

田狭が語った言葉そのままにするわけにはいかぬ。稚媛はいかにも古代人らしい、おおらかで健康的な、理想の女性だったのではなからうか。

恋多き武の大王としても知られる雄略は田狭の自慢話を聞くと、田狭を任那国司に任じ、朝鮮半島に追いやり、稚媛を奪ってしまふ。

五世紀、朝鮮半島は高句麗、百濟、

新羅の三国が対立していた。妻稚媛を奪われたことを朝鮮で知った田狭は、雄略と敵対関係にあった新羅に通じて、大和王権に反逆した。雄略は追討軍を派遣し、稚媛をめぐって吉備、大和、朝鮮半島を舞台に壮大なドラマが展開する。

これが「田狭の乱」として知られる事件である。

この際『日本書紀』は、別本の異伝として、稚媛が葛城襲津彦の子玉田宿禰の娘であることを載せている。これは吉備の大首長であった田狭が専制権力の確立を目指した大王雄略の圧迫を受け、王権と対抗しようとして大和の豪族葛城氏と結合したことを表わしているのではないだろうか。そもそも吉備の大首長田狭は吉備と大和で別々に妻を迎えていたのではないか？その可能性は充分あると思われる。

田狭と葛城氏は婚姻を通じて政治的連合を結んだが、結局、大王雄略により破られたということだ。これまで大和政権を支えてきた強大な力を持つていた吉備上道氏と葛城氏とが、大王雄略の即位と同時に失脚させられ、中央政界での力を失ったというの、田狭の乱の背後に隠された真実であろう。つまり、雄略朝になってのち大和王権から大豪族の影

響が排除され、古代国家への体制が整備されていったのである。

吉備は大和王権との密接な関係の中で、大和に匹敵する古墳を早くから造営してきた。すなわち、備前南部を拠点として早くから稲作が始まり、その豊かな生産力を背景に、金蔵山古墳、湊茶臼山古墳など全長百メートルを越す巨大な古墳を造営している。

大王雄略の時代には、岡山県赤磐郡山陽町一帯の平野が中心となり、いくつかの古墳が造られた。その中



周濠を備えた両宮山古墳

でも特に、周濠と呼ばれる幅四〇メートル余りの堀を巡らし、満々と水をたたえた両宮山古墳（山陽町、全

長一九二メートル）は全国に誇れる美しい姿である。この古墳は造山古墳（岡山市、全長三六〇メートル）、作山古墳（倉敷市、全長二八六メートル）に次いで、吉備地方で第三位にランクされている。墳丘の大きさは造山・作山に比べるとずっと小さいように見えるが、外側の周濠まで含めると、少なく見積もっても、全長三二〇メートル、全幅二〇メートルを軽く超えることになる。

この両宮山古墳は、五世紀後半の築造と推定されており、ちょうど吉備反乱の時代で、同古墳に埴輪が立てられていないことから、吉備反乱伝承の被葬者の墓ではないかと関連づけて考えられている。

王権に抵抗しただけでなく、王権篡奪の伝承まで持つ吉備の諸氏族の中でも、反乱伝承で大きな役割を果たしているのが上道氏である。

『日本書紀』には反乱伝承以外にも吉備と朝鮮南部との関係を示す語句は多い。朝鮮史家からは存在を疑問視されている任那日本府の官僚に吉備臣、將軍に吉備臣小梨、征新羅將軍に吉備臣屋代などが出てくる。また、吉備韓子那多利・斯布利は父を日本人、母を任那の女性として生まれたとある。

ところで、大王雄略によって夫と

この美しい周濠古墳を造らせ、その中に眠っているのはどんな人物なのか。妻稚媛を奪われた田狭か、悲運に泣いた稚媛か、それとも軍船を派遣した上道臣か。

過ぎ越した千五百年の歲月は、そうした伝承を季節の風と共に流れ去ってしまったのだろうか。移り変わった青田の向こうに緑の古墳が雨にかすんでいる。

第五回 郷土史講座 備南の磐座

古代の人々は神が山や巨石や清水に降臨すると信じていました。ですから古くは、神祀りの場はあつても社はありませんでした。

今でも、社殿の裏手や奥の院に磐座の存在する神社は珍しくありません。これらの神社を紹介しながら磐座信仰の起源について考えます。

【実施要項】

日程 五月三十一日(土)
時刻 午後二時~四時
会場 市民会館会議室
講師 平田恵彦歴史研副部長
資料代 一〇〇円程度

大河ドラマ異聞

「お杉の方」とはどんな女性だろう

出内 博都

毎年NHKの大河ドラマは、歴史愛好家にとっては何が選ばれるかが最も関心のあるところである。今年「毛利元就」は、ご当所番組としてすごいブームの中で快調に展開している。

一年五十回におよぶ長丁場である。史実をこえて多分にドラマを加えなくては話をもたない。また、史実のみで歴史は語れない。ほんの一部しか残っていない史実から、その時代の姿(真実)をどのように理解するかが歴史である。そのため作者自身の歴史感によってドラマ(虚構)を入れる。こうして一つの小説や劇

ができるのだと思う。「忠臣蔵」や「太閤秀吉」が何回出ても面白いのは、どんなドラマが仕組まれているかという興味があるからだろう。

それにしても、昨年の「秀吉」には少々参った。後半がいきさかオバーだったように思う。「正室おね」が病気で不妊症になる筋道は、彼女の生涯の生き方からみてうなずける。しかし「石川五右衛門」にはこだわりすぎたきらいがあつたように思う。

さて、絶好調の「毛利元就」だが、ただ一つ気になったのが父弘元の側室「お杉の方」である。彼女については「大方どの」という通称と、高橋姓であつたという以外何も分らない。

松寿丸(元就)は五歳で母を失っている(文亀元年1150)。おそらくその頃から日常の養育はこの大方殿が当つたものと思える。それから五年、十歳のとき父弘元(三十九歳)の死にあい、何も分らないまま孤児になつた(後年の元就の手紙)。それから後の十年間(永正十三年1151-1161、兄興元没。幸松丸の後見になる)二人の間はいつたいうだつたのだろうか。

大方殿(お杉の方)にしてみれば、反抗期の継子をかかえ、井上、桂、渡辺などの必ずしも一枚岩でない家臣をかかえ、さらに、もう一人の側室相合の方(この時一男四女の母)との女の戦いがあつた。こうした情勢の中で、元就元服までの数年間をどう描くか。ここらが史実でない歴史描写として、作家の腕の見せ所だろう。

作家永井路子氏はNHK人間大学(火曜十時四十分)「戦国武将の素顔」の中で、孤児としての松寿丸の心境を

「お母さまが病床についてしまったころ、松寿丸はお父さまの身辺にまつわりつく一人の女性がいることに気づきます。子供というものは、案外敏感なもので、なんだ召使のくせに……お母さまの敵だ、くらいに思ったかもしれない。そしてお母さまが亡くなると、この女が母親面しはしめる。ますます彼はその女に反発……」

と表現されている。松寿丸の反抗の姿の中に織田信長の少年時代の姿がダブッてみえるところに、新しい時代をつくる戦国武将の一面を偲ばすものがうかがえる。

若い身空で独り身となつた女性心理、頼るべき新しい主を、という弱気も頭をもたげるが、誇り高き彼女の現実はそのゆるさなかつた。弘元との間に実子をもつ相合の方との戦いであつた。

永井氏はまた

「正妻が亡くなるとこの側室はぐつとウエイトを増します。この女性に對抗して、猿掛城の御方様であるためには、どうしても松寿丸の母親であることを強調しなければなりません。まして弘元が死んでしまうと、子どももない側室の立場はいよいよおぼつかなくなり、松寿丸は猿掛城を守るのにとつて、松寿丸は猿掛城を守る

「旗」のような存在となります。松寿丸としても、孤立無援となった以上、大方どのを頼りにしなければなりません。いわば愛憎と利害のまじった二人三脚がここにはじまったと思われます」

と述べている。

大方殿についての記述は「毛利家文書」のなかに二ヶ所ある。その一つは弘治四年八月（一五六一）長男隆元にあてた家政の諸注意書（家政の執権制確立、家中に対し強硬たれ賞罰の確立、嚴命と忍耐）で、そのなかに次のようにある。

「我等ハ五歳にて母ニはなれ候。十歳にて父にはなれ候。十一歳之時興元京都へ被上候。誠無了簡ミなし子ニ罷成。大かた殿あまり不便ニ（之）躰を御らんすてられかたく候て、我等そたてられ候ためハかりニ若御身にて候すれ共、御逗留候て、御そたて候。それ故ニ、終二兩夫ニまみえられす、貞女を被逐候。然間、大かた殿二取つき申候て、京都之留守三ヶ年を送候。殊多治比を我々に弘元御ゆつり候へ共、井上中務丞渡候ハて、押領候、然共、興元も十六七之御事候と申、第一在京都之儀候条、國本之儀えおほせつけられす候つる處、中務丞不思議ニ死去仕候間、其後井上肥後守、伯耆守調法仕候て多

治比へよひ上、さ候て、興元之御事、元就十五之時御下候」

以下、現代語訳する。

「私は五歳で母を失い、十歳で父を失った。十一歳のとき興元が上洛して、何もわからないまま孤兒になつた。大かた殿（弘元の側室）がこの様をみて、あまりに不憫に思われ、捨て置きがたくて私を育てるために、まだ年若い身でありながら、留まつて育てて下さつたり、そのために、若い身そらで再婚もせず、貞女を通された。その間、大かた殿をたよりに兄の上洛の留守三年間を送つた。

殊に父弘元が多治比を私に譲つたが、それを井上元盛が渡さないで押領した。兄も年が若く、その上京都に在陣のこととて、国元のことまで仰せつけられ兼ねておられたところ、不思議に元盛が死去したので、その後井上肥後守俊久、同伯耆守俊秀の取り計らいで多治比へ呼びあげられた。兄は元就十五の年に京より帰られた。これは元就六十二歳のときの文書である。防長二国を一応平定し、戦国大名として一段の飛躍を期して有名な三子への教訓状以下、様々な教訓・注意・指示など一連の文書のなかにある追憶の一文である。四十年にわたる戦いにひと区切りをつけて、東の間の平穩の中で心の底からしみ

じみと湧き出る温かい追憶だったのだろう。テレビの脚本とは少しズレた感慨を受けるのは、追憶文のせいだけだろうか。ドラマのあのストーリーでは、お杉の方が少々気の毒に思える。

大方殿の記録の他の一つは、弘治三年（一五五七）の教訓状の中の第十二条に次の文がある。

「我等十一之年土居二候つるニ、井上古河内守（光兼）所へ客僧一人来て、念仏之大事を受候とて催候。然間、大方殿御出候而御保候、我等も同前二十一歳にて伝授候而。是も当年之今二至候て、毎朝多分呪候。此儀者、朝日をおがミ申候て、念仏十篇つととなへ候者、後生之儀者不及申、今生之祈祷此事たるへきよし受候つる」

以下、現代語訳する。

「私は十一歳の時（猿掛城籠の）土居に起居していたが、その時井上古河内守光兼（元兼も河内守を名乗るので「古」をつけた）の処に旅僧が一人来て、念仏の大事を説く講を催した。大方殿と一緒にこれに臨み、その伝授を受けて以来今に至るまで、毎朝大抵祈念している。それは朝日を拝んで念仏を十篇唱えることである。こうすれば後世のことは勿論、今生の幸福をも祈祷することになる

由である」

これは三子に謙虚な信仰を説いた項目であるが、元就の謙虚な信心の心は、大方殿の導きが多分に影響しているのではないだろうか。ここらあたりにも、ドラマに出てくる反抗期の継子と父の側室との葛藤への違和感や、写経を世間体をつくらう隠れ養にするごかししい女とは思えない感慨がわいてくる。

歴史研究家の増田美貴氏は、天文十四年（一五四五）正妻妙玖と同年に没した法名「順徳妙高大姉」という女性がこの大方殿ではないか、といわれている。元就四十九歳の年である。

移りゆく元就の運命、猿掛城の少年城主―宗家幼主の後見―宗家相続―有田城攻防の初陣等々、一人の母として陰ながら祈つた四十年、お杉の方として以て冥すべきであろう。

こうした二人の母の経験は、夫となり父となった元就に、妻や母としての女性の存在の大事さを、痛切に感じさせることになったであろう。

骨と皮だけの史実に、虚構という肉をつけて一つの歴史ドラマができあがるのである。画面を流れゆく画像の中に、自分だけのドラマを構成するのも、一つの楽しみではないだろうか。

ミニ旅の収穫

熊谷 操子

観楓期間の喧噪をわざと避けて、一月十三日、京都市街地の西北にある高雄の神護寺に詣でた。朝一番列車で出て終列車で帰宅というミニ旅で、目的は十年来の宿題である薬師如来にお会いすることであった。

清瀧川沿いの樹々を渡ってくる風は、相当冷たく感じたけれど、清流の音や、澄み切った鳥の声は、この季節の自然を十分に味わわせてくれた。木立に囲まれた自然石の石段は足に自信のある私でも、とても登りにくくて、初めのうちは一段二段と神妙に教えていたが、それもいつしか続かなくなっていた。何度も小休止を繰り返した後やっと登り切った。

金堂、五大堂、毘沙門堂、大師堂、鐘楼等が、それぞれの位置に、重厚さを秘めながらも、なんとなく寂びた感じで建っていた。古刹と呼ぶのにふさわしい堂々たる姿である。胸をときめかしながら金堂に入ると、正面の須弥壇上に、国宝の薬師如来、脇侍の日光月光菩薩、十二神将、四天王と仏像の一セット(無礼をお許しを)がズラリ。思わず、「ウワーツ」と言ったまま後は声なしで

あった。

湖北の鶏足寺(己高閣)で拝観した奈良時代後期のあの有名な薬師如来と、あまり年代は変わらないというのに、制作仏師の好みや、こうも如実に作品に現れるものかと思いがらじつと目を凝らした。天平彫刻の理念を見事に打破して、近寄り難いような威圧感さえ見せている。紅を少し残してキリリと結んだ口許からは、なんとも言えない迫力が伝わって来て、森厳で、しかも神秘的な見事な彫刻の技術は、私を捉えて離さない。どんな仏師がこの類稀な名作を造つたのだろうか、しばらくは魂を奪われた状態であった。金堂のうしろ、「へえー、こんな所に……」と思うような場所に多宝塔が建っていた。その姿をまるでひた隠しにしているように、何本もの楓がその枝を競っている。錦色に染まつた秋には、さぞ人目を奪つたことだろうと素直にそう思った。

ご住職に前もってお願いしておいたので、この多宝塔内を特別に拝観させて頂くことができたのは大きい感動であった。木造の上に薄い乾漆を施し、その上に胡粉彩色した一メートル大の五体の虚空蔵菩薩の座像がズラリと居並ぶ様は、実に麗しい。まだ拝観していない河内長野の

観心寺のあの如意輪観音像(国宝)と似通っているというのも嬉しく、その作風になにかしら優しい香気みたいなものさえ感じるのである。

秋を充分彩つたであろう樹々たちが、風雪に耐えた立派な枝ぶりで鐘楼を守っている。袴腰が実に見事とて長く流麗な裾に広げている様は、とても均整のとれた美しい落ち着きを見せて、国宝の梵鐘を囲むにふさわしい建物であった。聞き及んでいた「三絶の鐘」がの中で静かに息をひそめているのである。

和気齋範が真紹和尚の遺志を継ぎ、八七五年に一五〇斤の銅で、治工志我部海繼に铸造させたのである。その銘文の詞書は文章博士の橋広相が書き、八韻の銘一首を菅原道真の父菅原是善が作っている。この二つを当時の書家である藤原敏行が揮毫したという。

この鐘の高さ一五〇センチ、口径八〇センチ、小振りでありながらも铸造年代が古くて、しかもはつきりしていること。治工の名も志我部海繼という名人であること。文も立派、その文字も立派であること。これらが国宝となる所以であるらしい。

鳥羽法皇が、この梵鐘が欲しくて欲しくて再三無心を言うが、寺は応じないどころか、取られてたまるも

のかと、妙心寺に預けて隠してもらったとか。小振りとは言え釣鐘。この重い物を人目につかぬように妙心寺まで運ぶのは容易ではなかったと思う。欲しい物ねだりの駄々っ子みたいな法皇の仇は、なんと全山壊滅の状態にまで寺を焼き討ちにしたと言う。この目茶苦茶な話に呆れて苦笑の外なかった。帰宅して年表を調べてみると、なるほど一一四五年にこの寺の火災が挙げられていた。

余談であるが、欲しい物に対する執着や凝り性の法皇のことは、定朝様阿弥陀如来を彫らせたことでも知れる。当時の円派の仏師賢円に、平等院の定朝作を細かい所まで採寸させ、作業中の仏所へは度々足を運び、その首の角度、衣紋の細部の削り等にもあれこれ注文をつけ、気に入らぬ部分はどんどん修正させたと云う。現在、京都市の竹田にある安楽寿院は、法皇の離宮のあった場所だと言われている。問題のその如来の胸には、なんと珍しく卍が彫られてあって、欲しい物に対する凝り性のご性格を覗き見ることが出来る。和気清麻呂、最澄、空海、文覚等、この寺に関わって来た人達のことを思う時、神護寺の重さをあらためて感じる。そして十三日の感動を再び温めている雪の日の午後である。

龜山天皇伝承

小林 定市

鞆の町には、沼隈郡の長者新庄太郎の娘明子姫が、都にのほり時の帝の寵愛を受け、后となる出世物語が伝わっているが、備後の男子が天皇になった伝承を追ってみる。

先ず后伝承の、真言宗海吟山福禪寺の前身鞆の観音堂に就いて、寛永十六年（一六三九）三月、水野氏が寺社領の旧記の提出を命じた時、時の観音堂住僧栄親（栄観トモ）は次の様な寺伝を提出していた。

「観音堂は天慶年中（九三八〜九四七）空也上人来りて、天下七箇所の霊地、則ち当寺は其の随一の真言寺なり。本尊は海中より出現の千手観音なり。永祿元年（一五五八）鞆之浦炎上し当寺塔塔悉く類焼令め本堂一字残るなり」以下略す。

空也（九〇三〜九七二）は少年時代に半僧半俗の山伏として、全国の山や霊場を巡るその途次、危険な道は改修し、水の無い場所には井戸を掘り、野に捨てられた死骸があれば一カ所に集めて火葬をする等の、一連の社会活動を行っていた。

阿波の湯島や陸奥出羽の辺境まで遊行し、その間休むことなく「南無

阿弥陀仏」と、念仏を唱えて阿弥陀聖と呼ばれた。空也は晩年に、京都東山の西光寺（六波羅蜜寺）に住み、天曆五年（九五二）に、貴賤に勧進して十一面観音像を造立したり、大般若経六〇〇巻の写経を勧進するなど、宗教・文化活動も行った平安時代中期の僧である。

寺伝の観音堂と空也の関係を原資料として、約二十年後の寛文元年（一六六一）頃に、俳諧文の縁起

「備後国鞆之浦観音堂之縁起」の編著を完成させたのが、野々口立圃（一五九五〜一六六九）である。

次に、本題の天皇伝承であるが、「福岡県百科事典」の龜山上皇銅像の項に

「福岡市博多区東公園内にあり、像高四・八四m。明治二年（一八八八）県内有志で發起され、日清・日露戦争で高まつていく国家主義のシンボルとして、安場保和・福岡県知事をはじめ要職にある有志が発願者となった。特に同県警務部長・湯地

文雄は、長崎在任中、清国水兵の巡查殺害事件に手も足も出ず、国辱として苦い思いをしていただけに、銅像建立に献身的な努力をした。国防思想・護国精神をより高めるねらいで、元寇記念碑建立は国家的事業の色彩があった。原型は高村光雲、竹

福岡東公園に立つ龜山天皇像
備後の男子、平櫛田中が天皇（のモデル）になった。



内久一と並び木彫り御三家といわれた福岡出身の山崎朝雲の制作。上皇のモデルとなった平櫛田中が仮小屋のアトリエで卒倒したというエピソードがある。」

と記してある。一般には、平櫛田中はモデルを模刻していた事は知られているが、逆に平櫛田中をモデルとして製作された龜山上皇銅像が、福岡に行くときみることが出来るのである。

龜山天皇（一二四九〜一三〇五）の宮廷政府は、蒙古襲来時に伊勢神宮や博多の笠崎八幡宮に敵国降伏の祈念をはじめ、広く神仏に国家の加護を祈願して国防の体制を固める。

銅像の真偽に就いて、井原市の田中美術館に問い合わせた所、若かった明治時代の事は資料が殆ど無いとの事であった。平櫛田中は明治五年

（一八七二）井原市西江原の田中謙造の子として生まれ、十歳の時福山市今津町平櫛家の養子となった。

山崎朝雲（一八六七〜一九五四）は、福岡市博多の陶工の家に生まれ、明治二十八年第四回内国勸業博覧会で「養老孝子」が妙技三等賞を受け、翌年上京して高村光雲に師事し指導を受ける。以後格調の高い作品が多く、帝国美術院会員となり、文化功労者となった彫刻家。

明治三十年、山崎朝雲に一年遅れて上京した平櫛田中は、東京美術専門学校教授で木彫りの重鎮、高村光雲宅を訪れ、自作の「観音像」批評を求めた後光雲の弟子となった。

当時作成された有名な銅像、上野公園の「西郷隆盛」、皇居前の「楠正成」等は、いずれも光雲の木彫りによる原型から型取りをした作品であ

った。田中は明治三十四年、展覧会に出品した「童子歌君が代」が認められたのか、翌三十五年春には、青年彫刻家の勉強会である三・四会会員となっている。

いささつは不明であるが、亀山上皇銅像原型木型製作は、地元の彫刻家山崎朝雲に依頼された様で、明治三十五年に朝雲は亀山上皇原型木彫像を完成させている。当時の彫刻家は現代と異なり、彫刻だけで生計を樹てるのは難しい時期であった。

朝雲の仕事に弟弟子の田中が協力するのは当然の事で、田中自身が彫刻家のモデルになる事など無想だにできなかった出来事であったであろう。鑄造は同公園に立つ、日蓮上人銅像と期を同じくして、佐賀の谷口鉄工所が担当し完成させた。福岡県庁前の公園中央に聳える銅像（平櫛田中モデル）は、近代彫刻史に残る明治期の代表作である。

また、日蓮上人銅像の制作は、福山市川口町出身の三村日修が、日蓮宗絵本山身延久遠寺の七五世を勤めていた時、日蓮宗が単独で銅像建立の方針を決定した。これは奈良大仏・鎌倉大仏に次ぐ日本史上第三位の巨大青銅像（像高一〇・五m、重量七四t）で、明治時代を代表する最高最大の記念碑と評価されている。

陰陽思想と易で民俗を考える

門田 幸男

一、裸祭りを考える

二月十五日に西大寺会陽（裸祭り）が行なわれた。ところが、同じ日に御調郡久井町の稻生神社でも同じ行事が行なわれた。ということは、どうやらこの行事は仏様に何かを願う行事ではないらしい。日取りは旧正月に入つてすぐだから、新春を言祝ぐ行事だろうか。

旧暦では正月寅の月から春となる。陰陽思想では、秋と冬は陰の季節、春と夏は陽の季節とされるから、祭りの名称「会陽」は「エイヨウ」と叫ぶかけ声が語源（観光案内）となったものではなく、陽気の春がやってきたという意味で、行事の名称が先に来て、それをかけ声にも使うことにしたのだと思う。

会陽では、陰陽の二つの宝木（稻生神社は福木という）を奪い合うとすることだから、きのえ（木の兄）・きのと（木の弟）という春の呼び名をそのまま形にしたものといえる。では、この寒さの中で、裸になつて押し合うのはなぜか。

それは、衣服を着ては動くに不便とか、汗をかくとか色々考えら

れるが、水を浴びせられるから初めから裸なのだ。羽根もなく、鱗もなく、甲羅も持たない人間は、生まれながらの裸なのだ。

熱と光を無限に投げかける天は陽であり、それを受けて万物を育てる地は陰とされる。このことから、何も持たない人間は陰であり、土気とされる。この土気の裸の人間に水を浴びせると、群集の熱気で湯気となつて立ち込める。浴びせる水は冬の象徴であるから、表現を変えると、冬が雲散霧消していくということになる。

時間（冬）と物質（水）は全く次元が違うので、科学的に考えれば、これで時候を動かすなど出来ない相談である。だが、神頼みしか術のなかつた昔、一応体系づけられていた陰陽思想は、当時の人々にとっては頼もしい考え方だったに違いない。

二、お水取りを考える

西大寺会陽が修正会（しゆしんかい）のしめくりであるのに対し、お水取りは東大寺二月堂における修二会（しゆにかい）の行事である。月の名を数字で表わすようになった。たとえば、正月は寅の月、二月は卯の月である。また、よく知られているように、干支は時間と共に空間（方位）の尺度としても使われた。

さて、これらをもとにすると、東大寺とは平城京の卯の方角（東）にある大寺院であり、二月堂はその東大寺の卯の方角の端に位置している。陰陽思想では時間も空間も一体のものと考えている。そこで、卯の月とは何かを考えてみる。寅卯辰の三ヶ月が春であり、卯の月はその真中、春の盛りの季節であるはずだが、実際はまだまだ寒い。俗にお水取りがすまない春は本物にならないといわれる。これには深い訳がある。

お水を汲む井戸を「若狭井」と呼び、事実、良の真北に当たる若狭の神宮寺では「お水送り」なる行事が行なわれている。しかし、これは合理的に考えれば無理な話だ。水は低いほうに向かって流れるもので、山を越えて流れるはずがない。こんな簡単な理屈は昔の人でもわかつていたはずだから、これは自然の水ではなく、呪術上の水のことである。つまり、水は、水の兄、水の弟の方角すなわち北から来るべきもの、来るはずのものなのである。

ところで、この若狭井の建物の屋根には鬼瓦ではなく、鵜瓦（うい）が取り付けられている。鵜の色は冬の水気の黒色で、名前は春の卯と同じ音である。それゆえ、若狭井は陰陽思想の「水生木（水は木を生む）」の原理で、

卯の月の行事に使う井戸の性格を併せ持っているわけである。

奈良の地中から冬を象徴する水を汲み上げて、皆で飲んでしまえば、奈良から冬の寒気が消滅して本格的な春となるという計算である。

コジツケだ、詭弁だという声はどこからか聞こえてきそうだが、呪術とは、まあこんなものなのである。

さて、お水取りで欠かせないものに松明がある。僧たちが松明を持って駆け回ると、二月堂の中も外も火の粉だらけ、煙はもうもうとなる。

これは「火生土(火は土を生む)」という陰陽思想の原理から、火の粉はすなわち土気を表わしている。

一方、陰陽思想には「土剋水(土は水に剋つ)」という原理もある。この二つの原理から、松明の火は冬の寒気(水気)を殺す意思を表わしているのではないだろうか。

お水取りに集まる人々は、競って火の粉を拾うそうだが、これは土気としての灰を拾っていることになる。三、かまくらを考える

現在の二月十五日は新暦だから、旧暦では正月十五日を指している。いわゆる小正月は、私たちのいう送り正月の行事である。

福山のトンドは全くとお飾りと化しているが、元々は下部に膨らんだ

小屋があり、子供たちがその中に籠もったと伝えられる。

送り正月という名から連想されるように、トンドは訪れていた正月神を常世へ送り返す墓とも思える。だが実は、折目節目に仮屋に籠もる習俗は、生まれ変わり、若返りを意図する妊娠の状態を真似ているのである(吉野裕子説)。

その論拠としては、トンドの小屋の上には男根を表わす長い笹竹と女陰を表わす菱形、または六角の作り物を取り付けられているものがある(島根県大田市等)。福山のトンドではそれが鶴亀に変化してしまっている。せまくて暗い母胎に似た小屋に籠もって出てくることで生まれ直すのだから、大人が生まれるのは理に外れている。だから、トンドもかまくらも籠もるのは子供だけである。

ところで「かま」とは何か。釜は水と米とが籠もって飯に化す所であり、罐は水が籠もって水蒸気になり、釜は木が籠もれば炭となり、窯は土器が籠もれば陶器となる。一方「くら」とは何か。

「倉」は物が保存され、その年には稲と化す。つまり物が仮に倉に籠もる。このように考えれば、トンド小屋と同じことである。

では、なぜかまくらに水神を祀る

のだろうか。

易の思想では、北に位置するのが坎(あな)であり、その北は水の兄・水の弟の水を表わす。これはかまくらが雪洞ということも重なっていると思われる。

命あるものは皆生まれ出たときから休みなく死の方向へ移動していく。この運動から回避する方法として、籠もって出ることにより、今の瞬間を死への方向ではなく、今の上に積み重ねようとした。そんな「今」が「続日本紀」に出ている。すなわち

「中今」である(吉野裕子説)。有名な大原の産屋も暗くて狭い小屋である。この産屋は奇跡的に保存されているが、産屋は本来使用済みの時点で焼却されていた。この記憶がトンド焼きとして続いているのだろう。

産屋に何日か籠もって外へ出たときが呪術的誕生の時である。そこで赤ん坊は産屋にいる時は袖のないボロで巻かれているが、出るときに初めて産着を着せた。これを「産着の手通し」という。ボロを巻き付けられていたときは祖神と同じ蛇と考えられていて、ボロを脱ぐのは蛇の脱皮をまねている(吉野裕子説)。そして、この時初めて人の子と化るのである。

四、節句を考える

三月三日は雛祭り——これだけでは昔の人の心を探る糸口にはならない。三月は辰の月であり、上巳といって、最初の巳の日であったと伝えられている。これで考える材料ができた。

さて、雛祭りは初めは流し雛だったという。流し雛は人形に罪や穢れを背負わせて流すもの、つまり「禊」や「祓」の変形とされているが、このことは、今でも他に六月と十二月の大祓としても残っている。

ともかく雛祭りは水辺と深い関係があった。そこで蛇である。そもそも巳の日とは蛇の日である。蛇は水上歩行?が出来るから水辺に下りることは何ら不都合なことにならない。また、竜(辰)も深く水に関わっているのはよく知られている。垂直に落ちる水をさんずい(水偏)に竜、つまり「滝」と書くほどである。これにくねくねと移動する蛇を合わせると、昔、貴族などが曲水の宴をこの日に催した心情がわかるような気がする。

これらのことから「禊」とは、定説の「水注ぎ」からきているのではなく、「身削ぎ」すなわち脱皮する蛇からきているのではないか。「古事記」の阿波岐原の禊の段で、イザナ

ギが身に付けているものを順に投げ棄てる様は、まさにこの「身削ぎ」を表わしている(吉野裕子説)。

どうだろう。辰の月の巳の日(三月三日)からこのような理解の仕方

も可能になるのである。
さて、少し早いですが、釣り合いの上から五月五日すなわち午の月の最初の午の日(端午の節句)についても考えてみよう。

陰陽思想では、午は北の子と対立して、南であり、夏であり、火であり、正午である。水は低きに流れ、火は高きに昇る。

つまり、午は火気だから、午の月の午の日には、火気の性状に人間のほうもこれに合わせた行事を行ない、自然の運行を促進させようというわけである。

これを元に考え出されたのが、三重県桑名郡多度大社の上馬神事である。この神事は、非常に急な斜面を馬に無理矢理上がらせるのだが、なかなかうまくいかない。それで人々が押したり引いたりで大騒ぎとなる。

馬といえは、その性器の巨大さが印象に残る。このことから端午の節句の祝儀物が男根を象ったチマキとなったのではあるまいか。ちなみに雛祭りの菱餅は女陰を造形したものである。

「古事記」講座で、平田氏は「アマテラスのいる機屋へスサノオが天の班馬を投げ入れるのは不自然で、その本当の意味がよく分からない」といわれたが、私はこう考えている。

つまり、アマテラスは、易卦では「中女の離」である。ところが「離」はまた「火」でもあるから、屋根を剥がして馬を投げ落とす行為は、実はアマテラスが殺されたことを別な表現で述べているのではないかと。

吉野裕子氏は、馬すなわち男根をイメージするからスサノオに犯されたことを暗示している、と解釈されている。いずれにしても、上昇すべき火すなわち馬を逆に落とす、というのは容易ならざる表現で、杼(機織りで横糸を通す舟形の道具)で火処を突くのと同じく致命傷となる。

端午の節句から脱線したついでに、「白馬の節会」について少し書くことにする。これは宮中の年中行事の一つで、旧暦の正月七日、紫宸殿で左右の馬寮から引き出された「あおうま」の天覧のあと、臣下に宴を賜った儀式である。「万葉集」巻二十に大伴家持が白馬節会のために予め用意していたという次の歌がある。

「水鳥の鴨の羽色の青馬を今日見る人は限りなしといふ」

(鴨の羽色の青馬を今日見る人は寿

命が無限だという)

この歌は、仁王会の都合で節会が六日に繰り上げられてしまい、白馬抜きになったので、実際には歌われなかったというエピソードがある。

さて、陰陽思想から見れば、正月七日とはどのような日なのだろうか。正月は寅の月、木の兄・木の弟の木気の初め、春の初めである。木気の色は青であり、「木生火(木は火を生む)」の原理によって、木は火気の夏(午)へと進む。その上、陰陽思想では「見る」という行為も、火気に配当されているので、正月に青馬を見ることは自然の理になつていくわけである。

ところが、青馬(青黒い毛色の馬)は本当に珍しかったらしく、醍醐天皇のころから、白馬(芦毛の馬)が「あおうま」として用いられるようになるのだが、その意味が後にはわからなくなってしまふ。それで、平兼重の次のような歌が作られる。

「降る雪の色も変わらで牽くものを誰れ青馬と名付けそめけむ」
(降る雪の色と変わらないほど白い色をして牽いていくのに、いったい誰が初めに青馬と名付けたのだろう) ところが重要なのだが、なぜ「白馬」を「しろうま」と読むとだめなのか。

陰陽思想によれば、白は金気の色に

なり、「金剋木(金は木に剋つ)」の原理によって、木気の正月には避けられるべき色となり、「しろうま」では都合が悪かったのである。

また、吉野裕子氏は、午は十二支の七番目であり、正月の寅は三番目なので、この白馬の節会では、「三七」(二十一)という数の馬を見たのではないかともしよう。

午(馬)についてもう一つ吉野氏の説を紹介しよう。
「狐を馬に乗せたよう」という諺がある。狐が人をだます存在と見ると、この意味は「広辞苑」に代表されるように、「言う事の信じがたい様」を表わしていることになる。

しかし、陰陽思想から見れば、意味が全然違ってくる。
狐は土気の色をしている。したがって、狐(土)が馬(午=火)に乗れば「火生土(火は土を生む)」の原理で、土気の威力は倍増することになる。つまり、この諺は「鬼に金棒」とほぼ同じ意味を表わしていることになる。

また、狐といえは「お稲荷さん」だが、「火生土」の原理は、稲荷社の鳥居が、火気の色に塗られている訳も見事に説明している。皆さんは「広辞苑」と吉野説とは、どちらが正解と思われるだろうか。

真金吹く吉備中山周辺巡り

三谷 尚克

二月二十二日、ずいぶん前から思っていた吉備の中山と麓に座す吉備津・吉備津彦兩神社を巡る旅に出ることが出来た。

最初に吉備津彦神社へ。

駐車場に車を止めた頃は吹雪いており、人気のない神域は神さびた趣があったが、やがて晴天となる。

当社の御祭神は名前の示す通り、吉備津彦之命と他三十余柱。最初に社殿が出来たのは崇神朝と伝えるが、十六世紀後半、金川城主松田氏に焼き討ちされ、元禄十年（一六九七）岡山藩主池田綱政によって再建。昭和五年（一九三〇）に再び火災にあり、同十一年（一九三六）に再建。ただし、本殿、随神門、宝物殿は元禄当時のままである。

中山に磐座を有する。また、夏至の太陽を正殿に迎えるよう造営されており、朝日の宮と言われる。古くは気比（きび）神社とも呼ばれた。神紋は太陽と月を重ねた二重丸（金環食）に四葉木瓜および菊、桐紋。尚、忘れずに建物が市重要文化財に指定されている撰社の子安神社にも参拝したい。

続いて本殿横から中山頂上の吉備津彦之命の御陵を目指す。行程一・四kmとある。吉備の中山は標高一二二mで、古より人々が吉備路と呼んでいる風景の中心となる山である。

緩やかな山道を登っていけば、間もなく頂上かと思われるところに穴観音がある。古代祭祀跡と思われる自然石が三個あり、その一つの正面を舟形に彫り沈め、仏像（説明板には大日如来とある）を現わし、石の左側の面に口径二〇cm、深さ一六cm、底径四cmの穴を穿っている。穴に耳を当てると観音の音が聞こえると言う。仏像は幾星霜を経て風化している。

山道の反対側に由来の定かではない八徳神社と言う無住社がある。扁額は八徳寺だが、御幣が張られ、神仏混淆の典型である。おそらく池田光政の社寺整理の網にかかり、御神体が持ち去られたのを明治になって元の八徳神社となったが、穴観音信仰と一緒に、妙な社となったのであるう。

ほどなく頂上に着くと、御陵が現れる。前方後円墳で、きれいに管理されている。全面は広場で、見晴かす南方は岡山平野や丘陵が見える。犬を連れて散策する人があった。

下りは登りとは反対に吉備津神社

を目指す。御陵へ続く南側の石段を降りていくと立派な舗装道路に出会い、「左黒住教本部」「右吉備津神社」と標示板があるので迷うことはない。道の右は中山、左は冬枯れて水無川となっている細谷川である。古今集に「真金吹く吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」と歌われるこの細谷川は、備前・備中の境をなす。しばらく道を降りれば、吉備津神社が見えてくるあたりに滝神社あり。

吉備津神社にはよく知られている長い回廊の終わりから入り、本殿に向かい登って行く。途中、上田秋成の「雨月物語」に出てくる鳴釜神事（鳴釜）で知られる御釜殿や胡神社等が並んでいる。吉備津神社はあまねく知られているので説明の要もないが、応永三十二年（一四二五）竣工の比翼入母屋造の本殿は華麗で凜然としており、神のいます処にふさわしい。

吉備津神社を後に中山の山際に沿って吉備津神社まで歩く。途中ぜひ立ち寄りたところがある。牛の鼻ぐり塚（福田海）と藤原成親卿の墓である。

まず、牛の鼻ぐり塚は吉備津神社から七、八分の所にあり、牛の鼻ぐりを牛の唯一の形見として他の畜類を供養する塚で、今までに六六〇万

個を供養したと案内書にある。

この塚が面白い。塚は盛土と羨道がまったく失われ、玄室だけ（蓋はある）になった古墳を利用しているのである。塚の正面には狛犬ならぬ牛と豚の像があった。

また、この地は行基開基と伝えられる高麗寺跡と思われるが、山門、礎石が路傍に残るのみで、平安中期の軒丸瓦や須恵器・土師器の残欠が出土するとの寺の人の話であった。次に成親卿の墓を訪れるつもりであったが、時間の都合で行けなかった。

大納言藤原成親は平家を倒し、朝権を取り戻そうとして鹿が谷に西光俊寛等と謀議するも、事は漏れ、西光は斬られ、俊寛は鬼界ガ島に流され、成親も鬼島に流された。さらにここ有木の別所と呼ばれるところで逆茂木（菱）を立てた谷に突き落され、殺害された（『平家物語』）。治承元年（一一七七）、四十歳であった。また、『平家物語』には、成親の子丹波少将成経が、やはり鬼界ガ島に流罪になっていたが赦免され、京に変える途中この墓に詣でる場面がある。

「其墓を尋ねて見給へば、松の一むらある中に、かひがひしう壇もつひたる事もなし。土の少し高き所に少将袖かきあはせ…」

当時はただ土を盛っただけの哀れな墓であった。その後、明治三十年（一八九七）、高麗寺の後身、青蓮寺趾に中山通幽（福田海の開祖）によって今ある立派な墓が立てられた。

なお、江戸末期の歌人平賀元義は「あたらしい成親がごとき良き臣を有木の山の埋もれ木にして」と詠み、成親卿に想いを寄せている。

充実した心で吉備津彦神社の駐車場に戻り、両社ともこれからも遙かな春秋を経ていくのだと思いつつ、それと人生の短さを想い比べながら、少し寒くなってきた暮れなずむ早春の吉備路を後にしたのだった。

寄稿
吉田郷 亀井 福恵

吉田郷鳶を放ちて小六月
冬鴟の声突き当る郡山
山霧に血の匂ひなし曲輪跡
霧晴れてここに天主のありとのみ
関の声風葬にして冬構
敵味方統べて養虫日和かな
銃眼の死角に冬の虹立てり
木枯らしに皮膚厚くせり元就像
落ちたがる谷戸の落日木守柿
裏白や「三矢の訓」家訓とし

特別寄稿
木之上遺跡について 松岡 正三

神辺町東中条と三谷との境にある木之上山（標高三二・九・四 m）の山頂一帯に、城跡と寺院跡の複合遺跡がある。

地元木之内町内会では、平成三年三月に、「木之上遺跡を守る会」を結成して、遺跡の整備と保存に努めている。

平成四年十一月二十二日～二十三日にわたる備陽史探訪の会城郭研究会の方々の手による調査によって、南北三五九 m、東西二三二 m にわたる広大な遺跡である、ことが判った。

「山城探訪 福山周辺の山城三〇選」にも採り上げられ、田口会長の要請もあり、専門家ではないが、この遺跡について纏めてみることにした。

(1) 木之上城について
室町時代の応永年中（一三九四～一四二七）に築城された。応永二十九年（一四二二）ともいわれる。城主金尾氏の菩提寺である金尾山龍華寺の寺記によれば、城主の戒名、没年は次の通りである。

一、金尾太郎光国
（大徳院殿柳揚大居士）
応永十一年（一四〇四）三月三日没

二、金尾近江守光利

（雲山院殿洞雲大居士）

永享三年（一四三一）五月二日没

三、金尾遠江守信貞

（龍華寺殿前遠江守松巖道貞大禪定門）

宝徳二年（一四五〇）三月二日没

四、金尾出雲守信道

（月光院殿雲岳義信大居士）

長祿二年（一四五八）五月十日没

五、金尾兵庫守信実

（雲峰院殿洞霧仁智大居士）

応仁二年（一四六八）十月四日没

六、金尾伊豆守信義

（戒光院殿智信覺道大居士）

文明十二年（一四八〇）八月十五日没

七、金尾常陸守信虎

（華嚴院殿禪定道元大居士）

文亀三年（一五〇三）四月二十三日没

八、金尾丹波守信信

（誓向院殿悟道本阿大居士）

永正十四年（一五一七）三月二十日没

九、金尾三河守信高

（信解院殿智徳理園大居士）

天文五年（一五三六）十月十八日没

十、金尾長門守信国

（願正寺院月峰順信大居士）

天文十九年（一五五〇）六月十三日没

「備後古城記」などによれば、城主として金尾遠江守信貞の名前しか載っていない。「水野記」によれば、龍

華寺のところで、「金尾山龍花院禪宗宝徳二年（一四五〇）金尾遠江守建之」とある。

これも遠江守の死後の三月三日以後、二代の出雲守が先祖の菩提を供養するため龍華寺を建立した、と考えるのが至当と思う。その理由は、戒名に「前遠江守」とあるからである。尼子経久（一四五八～一五四一）が大軍を率いて、備後国へ侵入してきたのは、六代丹波守の時代からである。

経久が亡くなった翌年の天文十一年（一五四二）になると、大内義隆は尼子氏の本拠地出雲の富田城を包囲攻撃した。しかし兵糧が欠乏したため、総退却を余儀なくさせられた。その失敗から義隆は、備後の制圧に力点をおき、最初の攻撃目標を尼子方の神辺城主山名理興に向けた。

天文十二年（一五四三）から実に七カ年に及ぶ神辺城合戦が続けられた。経久の孫の尼子晴久（一五一四～一五六二）は目黒秋光らを救援に送ったが間に合わず、九月四日に理興は富田城へ敗走し、神辺城は落城した。その時から備後地方の国人衆は、大内・毛利氏の支配下に入った。時に天文十八年（一五四九）であった。

次いで尼子方の木之上城、四川滝

山城が、毛利方によって攻められることになる。『郡制二十五年』(深安郡)によると、中条は四川滝山城主(加茂町北山)宮越後守入道光音によって支配されていた、と記載されている。

四川滝山城は、陶晴賢の命をうけた毛利氏が、天文二十年(一五五二)七月二十三日から攻撃をかけ、数日後に陥落し、城主宮光音は備中松山城へ逃走したという。嫡男は剃髪して、西運寺(当時広瀬村上野)に入寺し、天文十九年(一五五〇)より相統して十七世永世法師となる。昭和二十五年(一九五〇)四月二十一日には、四川滝山城落城四百年顕彰追悼法要が、上野西運寺で盛大に勤められた。

従って、木之上城の落城は、神辺城の落城と四川滝山城の落城との間といえる。八代長門守信国が、戦いに破れて、木之上城山麓の龍華寺のある側の反対側の政角に、庵を結び僧となる。木之上山願正寺へと、発展変遷していく。弘治年中(一五五五〜一五五七)開基という。信国の院号が、願正寺院となっているので、領ける。元天台宗であったが、寛文七年(一六六七)に浄土真宗に改宗し、文政六年(一八二二)に現在地中組に移転した。

ところで、金尾氏の菩提寺龍華寺の初代住職は桂巖禪師(一四〇八〜一四八九)であった。岡山県芳井町の重玄寺の法弟で、宝徳二年(一四五〇)に就任した。

三代兵庫守信実の弟が、出家して僧となり角禅和尚と名乗り、龍華寺(禅宗仏通寺派)の住職になったので、初代桂巖和尚は、笠木山(五一・二・五m)に新たに高松寺(禅宗仏通寺派)を創建した。時に康正元年(一四五五)で、桂巖和尚は四十八歳であった。

龍華寺は、慶長元年(一五九六)に火災に遭ったが、秋山和尚により正保四年(一六四七)に再興された。なお、金尾遠江守信貞公四百遠忌が、嘉永二年(一八四九)三月二日に行われ、五百遠忌は昭和二十五年(一五五〇)四月三日に、龍華寺において挙行された。その時近隣から一九万八〇八円五〇銭の浄財を集め、釣鐘を新調したという。

また金尾遠江守信貞は、「たねのみやけ」(大和朝廷の直轄地から収穫した稲米を蓄積した倉)の跡地(広瀬村北山)に屋敷を建て、別館として利用したという。金尾氏没落後も、その裔孫が金尾姓を名乗り、中条・三谷・北山・高山方面に分散しているという。

永祿元年(一五五八)に杉原盛重は、吉川元春の推挙により、神辺城主となる。盛重の弟、三谷豊前守直重が尾道より来城し、木之上城主となる。

天正十五年(一五八七)に「山城廃止令」により、木之上城は廃城になった。城主三谷豊前守は、長和村片山城へ移る。兄盛重は天正九年(一五八一)十二月に既に亡くなっている。

因みに、天正十九年(一五九二)に毛利輝元は、元就の七男毛利元康を神辺城主として、富田城より入城させる。慶長五年(一六〇〇)に関が原の役後、毛利氏が封を削られ、福島正則の家老の福島丹波守正澄が神辺城主となる。

龍華寺の寺領は、田畑一丁七反余りあったが、福島丹波守によってすべて没収された。

元和五年(一六一九)福島正則が信濃川中島へ滅封されると、水野日向守勝成が、神辺城へ入城する。

水野家断絶後、検地の結果、余剩ができたので、中条は幕府直轄の天領になる。老中筆頭阿部正弘が、論功により一万石加増になり、嘉永六年(一八五三)から中条は阿部藩領となる。

木之上城は八代にわたる金尾氏の

居城として約一三〇年間、三谷豊前守の時代を含めると、約一六五十年間存在したことになる。

(2)木之上寺について

木之上寺の創建は、『神辺町史』によると、昭和二十八年(一九五三)に出土した巴瓦から、京都の六勝寺と同時代のもの、と推定している。

最近古老の話から、私は天仁年間(一一〇八〜一一〇九)と特定した。従って六勝寺の内、承暦元年(一一〇七七)建立の法勝寺、康和四年(一一〇二)建立の尊勝寺は、すでに建てられていたが、最勝寺、円勝寺、成勝寺、延勝寺は未だ建立されていなかったことになる。

平成二年四月に、「洪武銅銭」が出土した。応安元年(一三六八)〜一三九八)の時代のものである。明との貿易開始が応永十一年(一四〇四)で、応永十八年(一四四一)に一時中断し、永享四年(一四三二)に再開されているので、寺に養錢として、使われたものと思う。これらから、木之上寺は木之上城築城まで存在したと思われる。従って木之上寺は、約三二四年間存在したことになる。

空海が唐から帰国した三十三歳のとき、木之上山から一・二キ離れた所の広山寺を創建した。大同元年

(八〇六)の時である。明王院は翌大同二年に、空海によって創建されている。国分寺の創建は、天平十三年(七四二)であるから、山岳寺院がこの頃からつくられた、と考えることはできないだろうか。

中国の五台山を模してつくったとも、「神辺町史」には書いているから、瓦葺きの寺院の以前に、草や葦葺きの寺院があったとも考えられる。

(3)茨城について

奈良時代養老三(七一九)に、「備後国安那郡の茨城、芦田郡の常城を停む」と「続日本紀」に書かれている。

七世紀朝鮮との関係が悪化し、唐と新羅の侵攻に備え、北九州から瀬戸内海を経て、大和に向かう道々に、百済人による朝鮮式山城が築かれた。

当時穴の国であったこの地方は、(穴が安那になっていく)、穴の海とって西は網引の辺まで入りこんでいたし、東は中条木之内の辺まで海であった。このことは、「中条鯛」という人魚伝説によっても判る。

穴の海の湾岸防備に、常城や茨城が築城されたのである。「常から府中市本山町にわたる一帯」に常城を、「いもばらから木之上山一帯」に茨城を築城した、と考える。「いもばらぎ―いばらき―茨城」となった、と

推定する。

このことについては、豊元国氏が「芸備文化」(昭和三十三年)に、蔵王山(二二五m)を茨城である、と特定されている。しかし蔵王山は、養老五年(七二二)には深津郡になっているし、木之上遺跡の俗にいう鐘撞堂跡、二の丸跡、御殿丸跡等の巨大な石積みを見ると、茨城の可能性が高い、と思う。

御殿丸跡に立てば、遙か南の方向に蔵王山が見える。また一〇^{*}離れた常城から「のろし」による合図も可能である、と考える。

(付記)

- 一、金尾氏の出自については、埼玉県秩父郡金尾村で、先祖には滋賀県小野村の小野妹子王がいる。金尾太郎光国が山陰地方の日子氏に与し、孫の金尾遠江守信貞が木之上城主となり、日子方の最前線の城として活躍した、ものと考える。
- 二、三谷には、金山、銀山と書き、いずれも「かなやま」と呼ぶ地名がある。昔は金や銀それに銅が産出していたもの、と思われる。また屋敷跡とみられる、桑畑もあった。
- 三、木之上寺の跡地から出土した巴瓦と六勝寺の巴瓦が、同じ文様であることについては、今後の検討課題である。



木之上遺跡において、田口会長とともに。

黄河の旅

神原 正昭

平成八年二月六日、広島とかつての長安の都、シルクロードの出発点である西安を結ぶ直行便が開設された。これを期に、広島・福山のシルクロードの歴史を研究している方々と中国への旅を思い立ち、平成八年六月二日から七月二日までの十二日間の黄河中流から上流の旅に出た。一度は行ってみたかった中国シルクロードの旅である。

主な見学都市・場所

- 西安 半坡博物館・兵馬俑博物館
- 天水 麦石山石窟・玉泉観
- 臨夏 寺窪遺跡・炳靈寺
- 蘭州 甘肅省博物館
- 西寧 柳灣墓地・タール寺
- 北チベット 青海湖・チャカエン湖

これらの場所を十二日間で見学するのでスケジュールとしてはかなりハードである。メンバー男性九名、女性六名。最高齢者八〇歳の男性から三〇歳の女性まで年齢もバラバラである。広島から上海経由で西安へ行き、それからさらに北チベットへ。距離にして広島・上海間が一二〇〇

キロ、上海・西安間が一二六〇キロ、西安から北チベットのチャカエン湖までが一四〇〇キロと、中国はともかくにも大きく圧倒される。今回は北チベット付近で私の感じたことを書いてみたい。

中国の旅も八日目、六月二十八日朝七時三〇分、青海省の省都西寧市のホテル青海賓館を出発する。

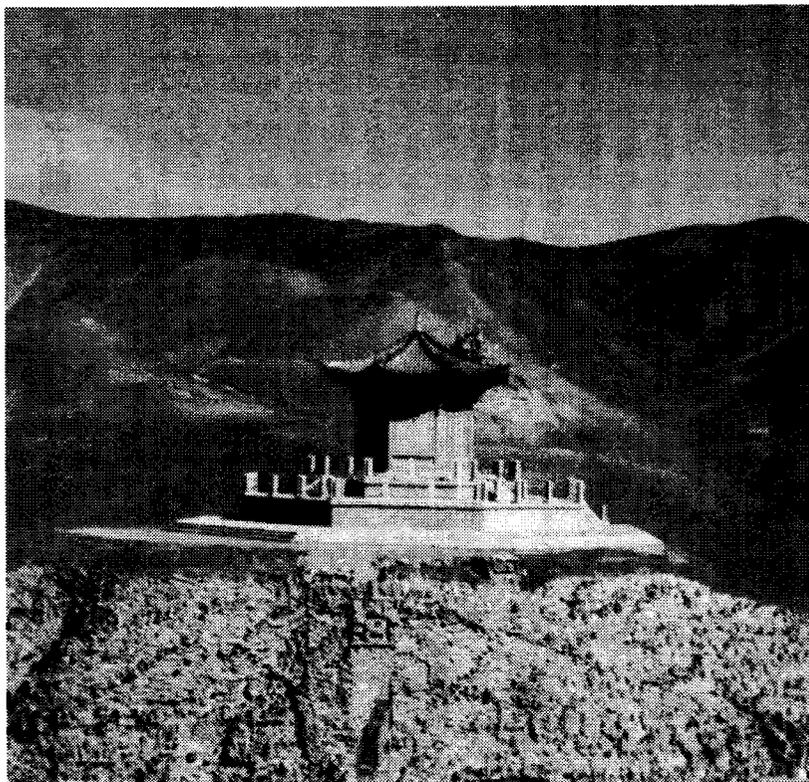
その前に、西寧市について触れておこう。同市は西安から特別急行列車で二十二時間かかる（この列車は帰りにも乗ることになる）。青海省は中国で一番大きな省で、七二〇〇〇〇平方キロメートル、海拔二〇〇〇メートルで、真夏でも朝晩は涼しい。主な民族として回族・チベット族・漢族・モンゴル族などであり、公用語もこれらの民族の言葉が使われている。一人当たりの所得が中国二十二省の中で最も少なく、貧しい省だとガイドが言っていた。西寧市はチベットのラサへ向かう陸路の玄関口である。

さて、北チベットへ向かうバスは、一路黄土高原の中にある青蔵公館を通り、海拔三五二〇メートルの日月峠を越えて、青海湖（モンゴル語で「ココノール」青い海を意味する）を通り、さらに奥のチャカエン湖まで三百キロ余り走ることになる。黄

土高原の長い旅になりそうである。バスは黄土高原を走ること約二時間で日月峠に着く。私はここでなんだか息苦しくなるが、気のせいだと思っていたが、女性の一人が気分が悪いと言っている。ここは標高が高く空気が薄いからだろう。そういえば、朝ホテルを出発するとき酸素ボ

ンベをバスに乗せていたのを思い出す。私は幸い酸素ボンベを使用せずにすんだ。しかし、タバコを吸う気分にはなれなかった。ガイドも標高三五〇〇メートルまで一気に来たので気分が悪くなったのではないかと言っている。彼は平気である。

西暦六四一年、唐の太宗がチベツ



日月山の峠 日月亭 標高 3,520m

トと友好関係を保つため、自分の娘文成公主をチベット王朝のソンツェンガンポ王に降嫁し、政略結婚によつて小民族を全部、唐王朝が支配しようとした。この時、皇帝自ら兵三千人を引き連れ、長安の都から半年がかりで文成公主をここまで見送りに来た。日月峠はそういう場所なのである。

高地なので風は冷たい。峠の稜線は北と南になだらかな峰に分かれて、南側に日帝、北側に月帝の二つのお堂が峠を挟むような格好で建てられている。お堂の建物は近代のものであるが、伝説が物悲しい。文成公主は結婚が決まってから父である皇帝から二つの鏡が形見として送られた。「故郷が恋しくなったらこの日鏡を、そして父母が恋しくなったらこの月鏡を取り出して見なさい。そうすると、故郷や父母が鏡に写し出されるだろう」と言つて手渡された。文成公主は長安からチベットに向かう間中この鏡を取り出しては泣いていた。そしてこの峠で皇帝と別れた。

その時、今まで見てきた唐域の畑や山の青さとはまったく異なる荒涼とした白い雪を頂くチベットの山々を目にしたとき、文成公主は「私は唐とチベットの友好と平和のために嫁いでいくのではないか」と過去の

想いを断ち切るために日鏡と月鏡をこの場所ですたき割つたという。

この峠から望むと伝説も史実に思えてくるから不思議なものである。

嘘だと思いつつも、人間はその現場に行つてみると、真実だと思うことがよくあるものである。詩吟を少し齧つたものとして、王維の次の詩を思い出す。

渭城の朝雨輕塵をうるおし
客舎青々として、(云々)
西のかた陽関を出ずれば
故人なからん

西域に赴く友と別れの寂寞しやくぼくの感あり。

この峠は中国からチベットのラサに向かう車が一息入れるところでもあり、土産物屋が二軒ある。ここでオリンピックで問題となった冬虫夏草を買う(一ケース五〇元、日本円にして約六五〇円)。この冬虫夏草はこの辺りでしか取れないとのこと。帰りに上海空港の売店で同じものが一万六千円で売られていた。これが日本に來たらいったいいくらになるのだろうか？

一〇時五〇分、日月峠を後にして青海湖・チャカエン湖に向かつて出発した。

神々の名前

佐藤 壽夫

私たちのまわりには何と多くの神々がいることだろう。日頃は気づかないが、ちよつと注意をしてみると、喧噪けんそうの巷まちの中にどれほど多くの鳥居や社を見かけることだろう。

そんなとき、日本人は神様とともに生きてきた民族であると感ずる。ところで、そんなおびただしい神々の中で、前々から私は疑問をもっていることがある。この国の神様はよく八百万の神々がおられると聞かされていた。「古事記」を読むに

に参加して勉強するうちに、色々の神様の名前に興味をもち調べてみた。とくに、スサノオとその子どもたちの名前、生いたちなどに心をひかれる。スサノオといえは、「古事記」や「日本書紀」に描かれた彼は、あまりぱっとしない異様な姿で書かれている。

「記紀」によると、スサノオはアマテラスの弟であるが、生まれつき粗暴な性格で、アマテラスや他の神々にさんざん乱暴な行為をしたため、ついには神々の怒りにふれて、高天原から出雲へ追放されてしまう。

私は、伝承で知つたスサノオや、

その子ニギハヤヒは心やさしく、偉大な英雄で、農耕の神であり、また、疫病などから人々を守護する神であつたと信じている。

疫病鎮守の神様といえはスサノオの神だ。

【備後国風土記(逸文)】におおむね次のような説話が載つている。

昔、大神が南海に旅をされたとき、途中で日が暮れてしまった。その土地に蘇民将来そみんしょうらいという者とその弟が住んでいた。兄の蘇民将来はとも貧乏だったが、弟(別の文献では巨旦将来)の方は大富豪だつた。ところが、一夜の宿を請われた大神に弟は惜しんで宿を貸さず、兄の蘇民将来の方は粟飯を炊き、心をこめておもてなしをした。

そののち年がたつて、大神は再び蘇民将来のところへ立ち寄られた。そして、「私はおまたちのためにかしてやりたいが、子や孫はいるか」と問われた。蘇民将来が「娘と妻だけです」と答えると、大神は、「茅の輪を腰に着けておきなさい」と言われた。そこでことばのままに着けていると、その夜のうちに蘇民将来の家族以外のものは悉く死に絶えてしまった。そのとき大神は「私はスサノオである。後世に病気が流行すれば、おまえは蘇民将来子孫と

行すれば、おまえは蘇民将来子孫と

いつて茅の輪を腰に掛けておきない
そうすれば、家のものはみんな疫病
から免れるだろう」と告げられたの
であった。

「茅の輪くぐり」の起源になった興
味深い伝承だが、この劇的な舞台と
なったのは、福山市から芦田川を少
し上った新市町戸手の地だとされて
いる。

ここには現在、素盞鳴神社があり、
社記に「当社社は、御祭神素盞鳴尊、
出雲国へ往來の途次、蘇民将来と巨
旦将来との伝説により、尊の徳を敬
仰して、蘇民の子孫と当時の士族と
が協力して、この地に小祠を建立し、
お祀りを始めたのが由縁である」と
書かれてある。

芦田川沿いにはスサノオの伝承が
点々と残っている。上流の上下町矢
野には、スサノオがこの地ではばら
く休息し、傍らの泉の水でのどを潤
し、多くの里人に見送られて隣の、
甲奴郡小童（ひち）に入ったという
伝えがあり、いまでも小童にある、
須佐神社のお祭りには、そのときの
故事にちなんだ神事が矢野の人たち
によっておこなわれている。

おそらく遙か昔、この地にスサノ
オと土地の人々との間に、何か一つ
の鮮烈な交わりがあったにちがいな
い。深く人々の心に刻み込まれたそ

の一つの交わりが、いつしかこうし
た逸話を生み出していったのではな
かろうか。

こうして、この逸話は人から人へ
と語り継がれ、スサノオは、人の身
に起こる災厄や、その時々々の疫病を
除く絶大な神様として、自然の猛威
の前になす術のない、無力な人間の
唯一の救いの神様とされてきたので
はなからうか。

疫隅神様もスサノオの神である。
備後地方の六月の大祓の「茅の輪
くぐり」の神事も悪疫退散、家内安
全、スサノオを祀る蘇民将来の伝承
ではなからうか。

ところで、スサノオの神は、多く
の別名をもっておられる。「記紀」に
書かれている大國主神（大穴牟遲
神・葦原色許男神・八千矛神・宇都
志國玉神）の別称の中にもスサノオ
の別名が、まことしやかに記されて
いる。

実は、八千矛神はスサノオの別名
であり、宇都志國玉神はニギハヤヒ
の神の別名である。

ここで、スサノオの呼び方と別称
をいくつかご紹介する。
【古事記】では須佐之男命。
【日本書紀】本文では素盞鳴尊と記
されている。また、素佐之尊（布都
斯御魂「ふつしみたま」）、諱として

神祖熊野大神奇御食野尊（かむろぎ
くまのおおかみくしみけぬのみこ
と）とも呼ばれている。

その他の別称は

- ・熊野速玉大神
- （くまのはやたまのおおかみ）
- ・八千矛大神（やちほこのおおかみ）
- ・神天照真良武雄神
- （かむあまてらすまらたけおのかみ）
- ・熊野加茂呂尊
- （くまのかもろのみこと）
- ・武速素佐之男尊
- （たけはやすさのおのみこと）
- ・進雄尊（すすのおのみこと）
- ・牛頭天王（うずてんのう）
- ・天王さん（てんのうさん）
- ・祇園さん（ぎおんさん）

など、多くの名前をもっておられる。
ところで、スサノオについて勉強
していくうちに何か引きつけられて
しまう神々がある。

- ・オオヤマツミ（大山祇神）山の神。
- ・タカオカミ（高禰神）水の神。
- ・イカヅチ（雷神）豊穰の神。
- ・オオワタツミ（大海津見神）海神。
- ・カグツチ（迦具土神）防火の神。

遠い昔から、我々の祖先が、人間
の生の営みとして、熱い祈りを捧げ
てきた神々ばかりである。
私は、少なくとも神様として祀ら
れている人が架空の人物だとは信じ

られない。人が、信仰の対象とする
ものは、それがひととき異彩を放つ、
山や木や石のような自然のものであ
れ、優れた人や鏡のようなものであ
れ、確かに実在するもの、もしくは
したものである。人間というのは、
誰か特定のものが勝手に作り上げた
ような架空の人物を祀ったり、祈り
を捧げたりすることは決してしない
ものだと思っている。

そこで、オオヤマツミの神を調べ
てみると、オオヤマツミの総本社は
芸予海峡の中央に位置し、大小の
島々に囲まれた愛媛県の国立公園大
三島にある。

この神社の社記をみると、
「和多志大神と称せられ、地神・海
神兼備の靈神であられるので日本民
族の総氏神として、古来日本総鎮守
と御社号を申し上げた。大三島に鎮
座されたのは、神武天皇東征のみぎ
り、祭神の子孫、小千命（おちのみ
こと）が先駆者として伊予二子名島
（四国）に渡り、瀬戸内海の治安を
司っていたとき、芸予海峡の要衝で
ある御島（大三島）に鎮座したこと
に始まる。

本社は社号を日本総鎮守、三島大
明神、大三島宮と称せられ、歴代朝
廷の尊崇、国民一般の崇敬熱く、奈
良時代までに全国津々浦々に分社が

奉斎された。延喜式には名神大社に列し、伊予国一の宮に定められ、官制により国幣大社に列せられた四国唯一の大社である……」

全国に一〇三二六社ある大山祇神社・三島神社の総本社である。

ところで、オオヤマツミは本当に実在したのか「記紀」の話からすると、そんな疑惑もわくのだが、彼はもろろん事実実在した人である。

彼を祀る神社は「記紀」の成立以前に創始されている。前にも述べたように、私は人でも物でも、実在しないものを神として崇めることは絶対にないと信じている。

備陽史探訪の会の歴史研部会では、平成八年十二月から、福山市加茂町の加茂谷周辺の石造物調査を始めた。調査の対象は石造物が主体であるが、調査区域には神社やお寺もある。

特に、山の裾から中腹にかけて小さな社がたくさんある。調査のついでに調べてみると、これが、山の神・荒神・大山祇神(大山津見神)・大海津見神(大綿津見神)・天神様など色々の名前の神様が祀られている。詳しく調べてみると、どうもその御神体はスサノオの神がお祀りしてあるらしい。昔、この加茂谷一帯も、山の神様としてではなく、人間の生の営みの守護神として、ずいぶん古

くからスサノオ様をお祀りしていたことがうかがわれる。五穀豊穡、疫病退散、村民安楽、家内安全。のどかな村落の平和な守り神として、諸々に祀られたのであろう。

私は、オオヤマツミ・タカオカミ・イカツチ・オオワタツミ・カグツチの神々もスサノオの変名ではないかと感じている。これからも「記紀」に書かれている神々のルーツを求め研究してゆきたいと思う。

歴史研石造物調査

昨年からの調査で加茂町周辺には思いのほか石造物が多いことがわかり、大きな成果が上がっています。本年度も原則として毎月第二・第四日曜日に調査を継続します。ただし例会と重複する場合は中止しないしは日程を変更します。

石仏・石塔・板碑・標柱などに興味を持っていらしゃる方、ぜひご参加ください。

〈実施要項〉

- 日程 四月二十七日(日)
- 五月二一日(日)
- 集合時刻 午前一〇時
- 集合場所 賀茂神社社務所(福山市加茂町芦原)

速報!

一泊旅行の目的地変更

前回の会報では、一泊旅行の目的地は「鳥取の旅」となっていました。が、多くの会員の方から、「今年も元就ゆかりの地を探索してほしい」という声が寄せられました。

そこで、旅行委員で相談した結果、目的地を鳥根県(出雲・石見)に変更することにしました。毛利氏とその宿敵尼子氏関係の史跡が多く存在するからです。

詳しい旅程・費用等は未定ですが、(次回案内までお待ち下さい)探訪候補地の一部を紹介します。

- ① 神原神社古墳(加茂町)
- ② 邪馬台国論争畿内説の論拠となった、全国に二枚しかない「景初三年」銘の三角縁神獣鏡を出土した鳥根県最古の古墳。古代史ファンは必見。
- ③ 鏝淵寺(平田市)
- ④ 見事な紅葉を誇る天台宗の古刹。出雲にありながら、尼子攻めの際、鏝淵寺和田坊榮芸は終始一貫して毛利に味方した。輝元はそれに報いるため根本堂(本堂)を寄進。
- ⑤ 一畑薬師(平田市)
- ⑥ 臨濟宗の古刹。「目のお薬師さん」して古くから信仰を集め、近年は心の目を開くということから、事を志す人の運を開き、厄を払ってくれる仏としても知られている。
- ⑦ 旧本陣記念館(平田市)
- ⑧ 江戸時代松江藩の本陣として使われた屋敷と庭を移築して公開。豪農・豪商であった木佐家屋敷の白壁と黒瓦が調和した外観は見事。また、屋敷内の枯山水の庭園は格調の高さを感じさせる。
- ⑨ 山吹城跡(大田市)
- ⑩ 鎌倉末期、大内弘幸が銀山防備のために築城。戦国期には、大内・尼子・毛利が銀山をめぐる争奪戦を繰り広げた。非常に整備されており、山城の遺構をはつきりと見ることがができる。
- ⑪ 竜源寺間歩(大田市)
- ⑫ 銀山の坑道を間歩(まぶ)といい、竜源寺間歩が唯一内部が公開されている。坑道の長さは二七三m、栃畑谷に通り返けになっている。
- ⑬ 出雲大社(大社町)
- ⑭ 説明不要でしょう。
- ⑮ 日御碕神社(大社町)
- ⑯ 日御碕灯台手前がある壮大な神社。神の宮と日沈宮からなる。現社殿は徳川家光の寄進で、出雲では珍しい権現造。

★宿泊は夕陽のとても美しい「眺瀾荘」(日御碕海岸)の予定です。

山吹城に登る

平田 恵彦

先日ふとテレビを見ると、番組名は忘れたが(たぶん「堂々日本史」)ひよっとすると「元就紀行」かも)、石見銀山の山吹城が映っていた。郭のそこちこちはまだ雪が残り、実に寒々とした風景だったが、大森の集落を見下ろすその様は、まさに要害山にふさわしいものだった。

山吹城は秋の一泊旅行で訪れる予定になっているのだが(小生は旅行委員なのです)、あのテレビでの風景が忘れられず、どうも落ち着かない例によって思い立ったが吉日で、三月三十一日の深夜に出発してしまっただも錦ちゃんは誘わなかった。なぜって?そりゃ平日だから。

ところが、小生は学校関係の仕事をしているので春休みの真っ最中。数年に一回という大仕事(明王台小学校の開校)を前日までにすませ、しばし時間の余裕があるのであります。

この日の夜十時過ぎ、山口副会長の家に押しかけ「おうおう、にいちゃん、例のものはどないなってるんねん、いったいつまで待たせんねん」と、借金取りよろしく会報の原稿の督促

をした後、「へへへ、実はこれから石見銀山に行くんや。どや、うらやましてならんやろ」と、さんざ自慢してやったのだが、この人はいつもポーカーフェイスで、それがどうしたという顔をしている。

しかし、まれに狂気の世界に飛び込むこともあり、この前一緒に行った奈良の馬見丘陵の古墳群では、佐味田宝塚(この古墳は、あの和田萃先生でも迷ってしまい、未だに行っていないというほど分からない場所にあるらしい)を探し出すといつて聞かず、セーター姿でブッシュの中を長時間徘徊し続けたのであった。

結局見つかりませんでしたけどね。で、突然、舞台は大田市大森の観光センター前の駐車場へ。真暗なうちに到着した小生は、クルマの中で仮眠。夜明けとともに起き出し、駐車場横のトイレで洗顔をすませた。

七時前に山吹城へ向かう。道は観光バスがなんとか通れる程度の一車線。途中に西本寺があり、この山門が山吹城の追手門を移築したものだといふ。ちよつと見ると中央の柱が太い六脚門である。うーむ。山城登山口の手前には広い駐車場があり、すぐ向かいには無料休憩所もあってなかなか力が入っている。登り始めるとすぐ、畑で野良仕事

をするおばあさんと遭遇する。「これ山吹城へ行く道でっか」と挨拶代りに聞くと、馬鹿なことを聞くといつた表情で「そうや」と一言。道はとても整備されており、間違えようがない。それにしても山城にしては道が緩やか過ぎるぞ、これは。

後でわかったのだが、このあたりが「下屋敷」の字を残す城下の一郭だったらしいのだ。調べてみると、竹や杉林の中に「焰硝蔵」や「休屋敷」があり、大規模な石垣も残っているとか。こちらはまったく知らずに通り過ぎる。やっぱり「先達はあらまほしきもの」である。

しばらく登ると、道は少しずつ急になってくる。やはり山城はこうでなくてはと思ううちに尾根に出る。ここは片側に土塁(と思う)が残っていた。その先には、な、な、なんとコンクリートの階段が天に続いているではないか!

「何じゃこりゃ」と思いながらも登っていくが、これがとても急である。階段下の山肌を覗いてみると、直登するには手をつかないときつそうなる所もある。半ば納得するが、コンクリートは感心しない。しかも、かなり以前に造つたものらしく、足を乗せるとグラつくものもあり、気をつけないと捻挫しまう。百段登ること

に休みを入れながら数えてみたが、一番手前の郭まで五百数十段、最終的には約六百段あった。登山口から本丸まではおよそ四十分である。

本丸からの眺めは本当にすばらしい。眼下には谷に沿って町屋が並び、銀山、仙の山は目の前にある。遙か東には三瓶山が三つのピークを仲良く並べ、北西には日本海と仁摩の港が見える。南は矢滝城山(銀山を押しさえていた旧城)を始めとする山塊が折り重なっている。

矢滝城の麓には難所として有名な降路坂がある。毛利支配の時代には、大森から山吹城の下を通り抜け、この坂を越えて温泉津へと続く道が幹線だったようだが、今は中国自然歩道、クルマは通られず、歩く人もほとんどいないらしい。

山城の遺構は非常によく残っている。いや、雑草がすっかり刈られていてとてもよくわかるといったほうが正解か。さすが、国の史跡だけのことはある。

どんなにすばらしい遺構を持つ山城でもブッシュによって見学できないければ、面白さは半減してしまう。昨年、錦ちゃんが行つた若桜の鬼ヶ城がそうだった。馬場がすごかった(小生が見学した中では最大)。石垣もほんとうにすごかった。でもブツ

シユに覆われてよく見られなかった場所もたくさんあったのである。あの遺構の全部が見られたらと、今でもとても悔しい気がする。

その点、山吹城は申し分ない。本丸を始めとして、頂上部に全部で十ある主要な郭は下草がきれいに刈り取ってあり、ふつうの山城でははつきりしない「武者走り」とか「犬走り」とかいわれる郭間の連絡路まで明確にわかるほどである。ただ、下の図面（大田市教育委員会「石見银山遺跡発掘調査概要6」平成五年）にある郭10の南側の畝状堅堀群は、それほど注意深く見なかったせいもあるかもしれないが、少なくとも郭に近い上部ではあまりよくわからなかった。

主郭はほぼ方形で、長径は約五〇m、短径は約三〇mほどあってかなり広い。礎石は残っていないが、ほぼ中央に記念碑が立っていた。この主郭を中心に両側に郭が段々に構築されており、いわゆる連郭式山城である。北の郭の端から南の郭の端まで直線距離で約二五〇mだが、ひとつひとつの郭は比較的大きく、各郭間があまり離れず接近しているように思う。これはこの山が他と独立した山容をしていることと無関係ではないだろう。詳しく調査すれば、郭

は全山に存在し、堀切もあるのだろうが、登山道中にはあまり横堀が必要ないような山である。

主郭の南には、唯一、大規模な横堀があるが、郭間が完全に切れているのではなく、東端がつながっている。少し広くなった平地がある。ここに櫓があつたのだろう。南側の郭が落ちたとしても、この横堀を越えて主郭に侵入するには相当の犠牲を覚悟しないとだめだと思う。

いずれにせよ、図面を見るとおり大手は北側なのだが、防御は南を強く意識している山城である。二時間ほどあちこち見て回り、搦手（南）側から下山した。下り切ると、目の前で竜源寺間歩がいらつしやいという感じで待っている。見学料四百円。三時過ぎまで大森中の史跡を見られるだけ見て（林道を上って仙の山の银山遺跡と毛利の陣城跡にも行ったもんね）、市役所の観光課と教育委員会に行つて資料をもらう。

市教委の人とは話が弾んで、発掘報告書をタダでもらつてしまった。その話の中で出た、元就が重要視したという温泉津の鵜の丸城（海城）に行つてみたのだが、陽が落ち始めていてゆっくり見学できなかった。もっとも、時間があつてもブツシユがひどくて大変だけど。

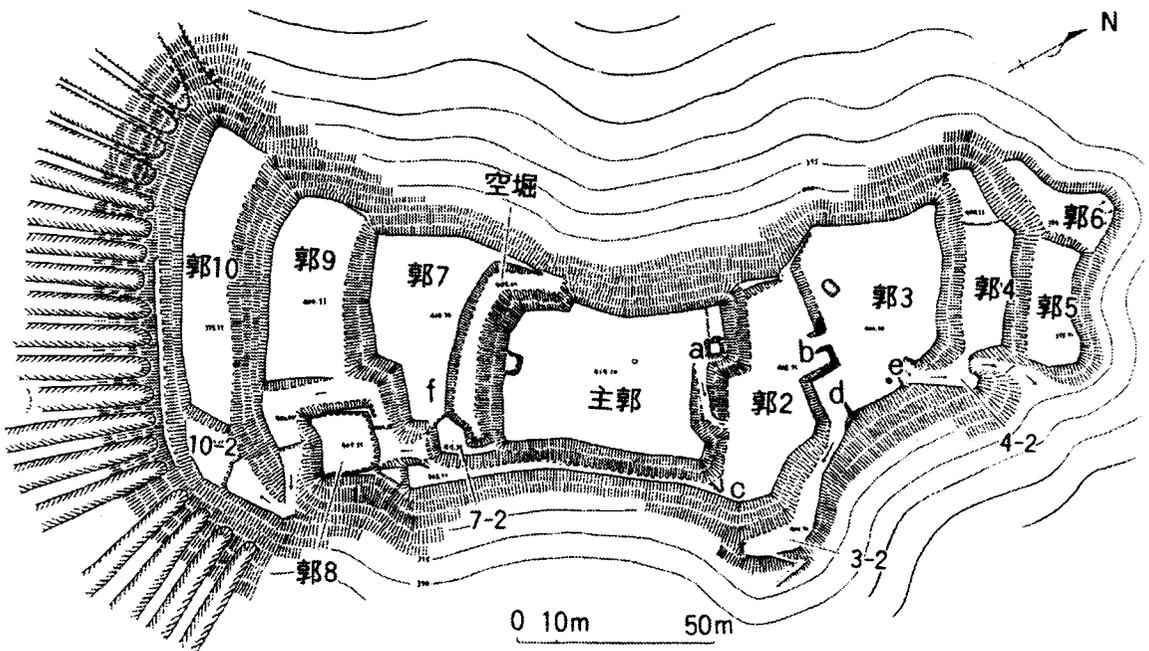


図1 山吹城（平成元年12月2日調査、寺井毅作図）
山吹城平面図（1/500）をもとに作図

事務局日誌

▽二月一日(土)

古墳講座Ⅲ「潮崎山古墳・曾根田白塚古墳見学会」参加一三名。

終了後、有志で相方城へ。それにしても相方城周辺の変貌ぶりにはただただ驚くばかり。

▽二月八日(土)

「古事記」を読む。参加二三名。終了後、会報75号発送作業。

▽二月十五日(土)

「備後古城記」を読む。参加一五名。

▽二月二十二日(土)

第二回郷土史講座
「杉原氏と山手銀山城」市民会館会議室で。講師は木下和司さん。

参加者が多く、急遽部屋を変更。参加五二名。

▽二月二十三日(日)

石造物調査。参加一三名。
古墳めぐり下見。参加一二名。

▽三月一日(土)

古墳講座Ⅳ「加茂岩倉遺跡と銅鐸」参加一五名。

▽三月八日(土)

「古事記」を読む。参加二五名。終了後、行案内発送作業。

▽三月九日(日)

加茂町石造物調査。参加九名。

四国八十八カ所巡りの石仏を調査する。荒れた山道を地元の方の案内で、雑草を刈り取りながらの調査になった。

湯舟城測量調査。参加一一名。

▽三月十五日(土)

「備後古城記」を読む。参加一六名。
▽三月十六日(日)

「元就ゆかりの水軍城を訪ねて」備陽史探訪の会の参加者〓四〇名
鞆歴史資料館の参加者〓一〇〇名
池田館長、田口会長、出内さん、平田さんが講師を務める。

▽三月二十三日(日)

徒歩例会「山手銀山城登山会」担当城郭部会。参加七三名。
やはり山城ファンは多かった!

▽三月二十九日(土)

第三回郷土史講座
「毛利元就と備後の国人」
講師田口会長。参加八〇名。

さすがに会長の講師とあって中央公民館の大会議室が超満員となった。

▽四月五日(土)

古墳講座Ⅳ「尾市十字塚見学会」参加一五名。

新市歴史資料館と正福寺裏山古墳群も見学する。道に迷う人が出て遅くなったが、田口会長が迎えしてくれた。感謝、感謝。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

今後の定期講座

【「古事記」を読む】

日時 五月一日 午後二時
場所 中央公民館会議室。
資料代 一〇〇円程度。

【「備後古城記」を読む】

日時 五月十七日 午後七時
場所 中央公民館会議室。
資料代 一〇〇円程度。

★五月度の古墳講座は「親と子の古墳巡り」に代替します。
したがって講義はありません。

第一五回 親と子の古墳めぐり

〔主催〕 備陽史探訪の会

〔共催〕 福山市教育委員会

〔目的〕

親子で、古墳を見学することや遺跡に触れあうことにより、歴史を学ぶ楽しさや面白さを体験してもらい、歴史学習とともに文化財の大切さを再認識してもらおう。併せて親子の触れあう一時的楽しさを味わってもらおうことを目的とする。

〔実施要項〕

〔日程〕

五月五日（祝日・月）小雨決行

〔集合時刻〕

午前八時三〇分

中国バス服部行 八時五五分乗車

〔集合場所〕

福山駅南口「釣り人の像」前

※現地に近い方は、九時二〇分に竜泉寺へ来てください。ただし、クルマでのご参加はご遠慮下さい。

〔解散時刻・場所〕

午後三時三〇分ころ現地（弥生ヶ丘公園）で解散。

※最寄りの駅は福塩線「近田」

〔見学場所〕

福山市駅家町にある古墳時代後期の古墳を中心にくぐります。石棺の残る北塚古墳、巨大な横穴

式石室をもつ大迫金環塚古墳、備南で最大の前方後円墳の二子塚古墳など、芦田川流域を代表する古墳を見学します。

北塚古墳―刈屋古墳―大迫金環塚古墳―服部大池（昼食）―権現塚古墳―宝塚古墳―狐塚古墳―二子塚古墳

〔参加資格〕

5km〜6kmの距離を歩行可能な方。ただし、小学校六年生以下の児童については原則として保護者の付き添いを必要とします。

〔参加申し込み〕

往復ハガキに参加希望者と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同士の関係（児童・生徒は学年も）を明記の上、四月二七日までに事務局まで申し込んで下さい。資料作成の都合上必ず申し込んでください。大人の単独参加も可能です。

ただし、申し込みが一〇〇名を超えると、締め切ることがあります。

〔参加費〕

資料代・保険料込みで大人五〇〇円、子供三〇〇円。ただし、交通費は各自負担です。

〔その他〕

当日の弁当・飲み物は各自持参して下さい。なお、歩きやすい靴、服装は歩きの出来るものを着用して下さい。

第四回 郷土史講座

吉備南部の後期古墳について

古墳時代後期、吉備南部の古墳の特色は二つあります。

第一に、多数の大型横穴式石室墳の築造であり、第二に、群集墳の爆発的増加です。この二つのダイナミズムから、古墳時代後期から終末期にかけての古代社会の大変動を読み取ることができるとは思います。

とくに、吉備においては「雄略紀」

「清寧紀」に記録された吉備の反乱伝承、すなわち吉備下道臣前津屋の誅殺、吉備上道臣田狭の反逆、星川皇子の王権篡奪未遂事件との関わりを考えるとき、それらが古墳の築造にどのような影響を与えているか、実に興味深いものがあります。

こうもり塚古墳、箭田大塚古墳、牟佐大塚古墳、二子塚古墳などの巨大横穴石室墳と三因千塚古墳群、操山千塚古墳群に代表される群集墳を例にとりながら、網本さんにやさしくお話いただきます。

〔実施要項〕

日程 四月二六日（土）

時刻 午後二時〜四時

会場 中央公民館会議室

講師 網本善光古墳部会副部長

資料代 一〇〇円程度

会報 77 号 原稿募集

「備陽史探訪」第 77 号の原稿を募集します。随筆、短歌、俳句、マンガ、歴史に関する小論など何でも結構ですが、一つの号につき原稿は一本だけにして下さい（厳守）。

タイトル・氏名別で、本文を縦書き一六字×（四〇〇）字詰原稿用紙の場合、下四字を空けて使用。（厳守）二四〇行以内で書いて下さい。最近原稿が激増していますので、写真を含めても二ページ以内（写真は原寸で半ページ）をお願いします。

切りは五月一七日（土）です。原稿は事務局へ郵送して下さい。

なお、予算上の都合や記述内容の問題で掲載できない場合があります。また、編集段階で趣旨を変えないように原稿に手を入れることがありますので、ご了承ください。

編集後記

「山城志」14号との同時配送、両方ともご堪能いただけましたでしょうか。一年ぶりの復活ですが、編集はやっぱり疲れます。（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局 ☎ 七二〇

福山市多治米町五一一九―八

☎ 〇八四九（五三）六一五七